

# 巻頭言

## 「オンラインの集まり再考」

理事長 新谷友良

新型コロナウイルス感染拡大で会議・集まりをオンライン形式で始めて1年半が経過します。

最初の頃は、要約筆記をどのように表示するかが課題となりました。全国要約筆記問題研究会（全要研）にいろいろ協力いただき、オンライン会議アプリ Zoom の共有画面を利用することで、安定的な要約筆記表示が実現し、協会の理事会や専門委員会・専門部の集まりなどで、オンライン会議が普及しました。

それと並行して、要約筆記の入力場所やインターネットへの接続機材の準備が問題となりました。現在は、利用者がインターネット環境を整えた要約筆記入力場所を準備し、要約筆記者がそこに集まり入力する方法が多くとられています。

ICT の急速な進歩によって、オンライン会議に加えて、オンライン診療やオンライン授業などが広まっています。一方ではオンラインのメリット・デメリットが濃淡を以ってさまざまに議論されています。時間を超えて、距離を超えて利用できることは、オンラインの最も分かりやすいメリットです。要約筆記の準備などの情報保障の費用を別にすれば、オンライン会議などに伴う直接的な費用もずいぶん安くつきます。

一方、私たちの会議を例にオンラインのデメリットを考えてみると、画面を長時間見ることでの疲れ、要約筆記画面と参加者画面を切り替えながら見る疲れがあります。共有画面に会議資料と要約筆記画面を表示できない不便さもあります。そして、疲れも加わった会議内容の理解不足、コミュニケーションの不全感が大きく残ります。

オンラインでの集まりでは、人の集まりにある大切なことのいくつかが失われることに私たちはもっと敏感になる必要があるのかもしれない。話相手の表情や声の調子はある程度オンライン画面で見ること・聞くことができますが、参加者の息遣いや匂い、肌触りなどは、オンラインでは伝わってきません。ここ1年半の閉塞した暮らしから、人は大変な厚みのある、多様な方法で毎日交わっていることを実感します。一日千秋の思いで、飲み屋のカウンターで仲間と隣り合わせに、肩をたたき合いながら馬鹿話をする日を楽しみにしています。